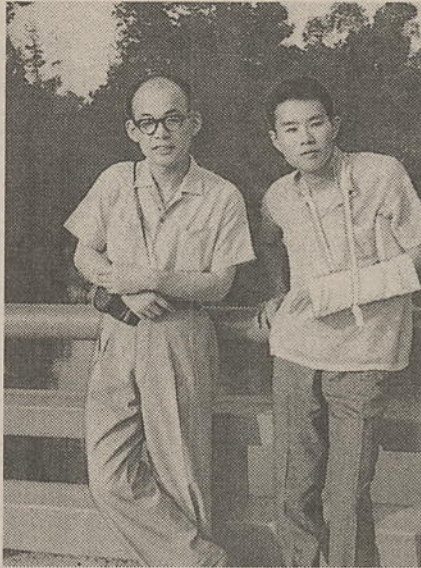


ドクター内田のジャズ

〜19〜



ドクター内田宅に同居していたころの富樫雅彦(左)＝愛知県・岡崎公園で

久野ちゃんのお世話で「クラブ東京」のハウスバンドと

なった富樫雅彦カルテットの演奏は、またたく間に名古屋のミュージシャンたちの評判になった。

もっともただでさえ暇だったお店が、いつしかジャズメソンのたまり場となって、大変だったはずだが、気づぶのいいママさんは、他で稼ぐから大丈夫とほかり、好き放題のジャズをがまんやらせて

富樫が名古屋でたたいいてい、といううわさは、東京でも広まったとみえて、やがて名知れたプレーヤーたちが乗

器片手に現れて、飛び入りする光景が見られるようになって。そんな人たちの中に「ジョージ川口とビッグフォー」のメンバーもいた。

彼らの名古屋での仕事は、主として大須の「温泉パレス」だったから、当然、ポビユラーな曲目しかなかった。その欲求不満を吹っ飛ばすような熱っぽい演奏を深夜までくりひろげるのだ。

一銭にもならないこうした酔いしびれた本物のジャズ

彼らの名古屋での仕事は、主として大須の「温泉パレス」だったから、当然、ポビユラーな曲目しかなかった。その欲求不満を吹っ飛ばすような熱っぽい演奏を深夜までくりひろげるのだ。

一銭にもならないこうした酔いしびれた本物のジャズ

一銭にもならないこうした酔いしびれた本物のジャズ

酔いしびれた本物のジャズ

アフトアワーズのセッションに熱中するのが「ジャズメン気質」なんだから、ファンとしては何ともうれしくなってしまうんだねえ。テナーの松本英彦、ピアノの八木正生、そしてアルトの渡辺

気投合し、今日に続く親交がはじまるのだけれど、これも元屋に呼んだ久野ちゃんのおかげと言えり。そしてその時貞夫は、まだ二十五歳からいだった。

その富樫も、不幸な事故から身になりながら、音楽的にも人間的にも、たゆまぬ前進を続けているのは、いまさら言うまでもない。

(内田 修)